小豆沢病院　地域医療連携室だより

# あずき通信　2010年4月 第1号

私たちは患者様の人権を大切にし、命は平等の立場で安心して利用できる病院を目指します

小豆沢病院ホームページ　www.kenbun.or.jp

発行／医療法人財団健康文化会
小豆沢（あずさわ）病院地域医療連携室
発行責任者　西坂昌美
東京都板橋区小豆沢 1-6-8
電話 03-3966-8411（代表）Fax03-3966-0151

皆さんこんにちは、小豆沢病院です。

小豆沢病院は1956年(昭和31年)に診療所から病院となり、以来、患者様と地域の皆様に支えられて、地域医療に取り組んできました。来年は55年目を迎えることになります。

医療崩壊と言われる今日、救急医療や急性期医療・慢性期医療、在宅医療など、あらゆる場面で患者様を守るために、医療機関や福祉施設がそれぞれの特徴を活かしつつ地域の中で連携していくことが強く求められています。

当院は134床と微力ではありますが、医療連携の中で役割を発揮していきたいと考えており、当院の有する医療機能(右表)や職員の働いている様子を、随時、この通信でご紹介させていただきます。

患者様にも、医療機関の皆様にも安心してご利用いただけるよう努力してまいりますので今後ともよろしくお願い致します。

院長　井上修一

**【地域における当院の役割(2009年6月16日改定)】**

(働くものの医療機関、保健予防活動)

1. 働くもののいのちと健康を守り、健康で安全に働くための職場環境づくりや健康障害の予防を支援する役割
2. 地域の保健予防活動の推進

(医療)

3. かかりつけ医療機関としての役割
4. 一次・二次救急医療
5. 消化器疾患の診断・治療技術の向上と、地域における役割の拡大
6. 動脈硬化につながる糖尿病やメタボリックシンドロームの予防の推進
7. 子育てをサポートする小児医療

(リハビリテーション活動)

8. 回復期・維持期のリハビリテーション

(高齢者の医療と介護)

9. 在宅支援
10. 終末期の医療と看護、介護

(地域連携、健康づくり・まちづくり)

11. 地域の医療・福祉機関、行政との連携
12. 地域の方々と共同して、健康づくり・まちづくりをすすめる役割

(医療従事者の育成)

13. 臨床研修指定病院として医師、看護師をはじめとする地域医療の担い手を育成する役割

## 地域医療連携室です

いつもお世話になっています。

小豆沢病院の入院機能とともに、法人内の介護老人保健施設志村さつき苑、７つの医科診療所、１つの歯科診療所、５つの訪問看護ステーション等のネットワークで、患者様とご家族を支えてまいります。

お気軽にご相談ください。医療機関の皆様は、電話でのご連絡とともに、診療情報提供書のご送付をお願いいたします。

〈電話〉０３（３９６６）８４１１（代表）
〈FAX〉０３〈３９６６〉０１５１

中村直也副院長（連携室長）
広瀬桃子（事務副主任）
山崎いおり（事務職員）
西坂昌美（事務長）
日向寺美恵子（副総師長）（連携副室長）

## 回復期リハビリテーション病棟の紹介

５階のレクレーション室

４階のリハビリテーション室

## 栄養サポートチームの紹介

上：砂田医師
下：栄養ｻﾎﾟｰﾄﾁｰﾑの回診の様子

## 積極的な生活リハビリに取り組んでいます

回復期リハビリテーション病棟師長　**西坂　利美**

当院の回復期リハビリテーション病棟は、5 階にある 40 床の病棟です（2007 年 6 月開設）。病棟医長の川口博之医師を先頭に、看護師 13 名、介護福祉士 9 名、26 人のリハビリテーション職員との連携を充分に取りながら、リハビリテーションの成果を病棟の生活に活かせるようにしています。

積極的な「生活リハビリ」の視点から、ボランティアの協力もいただいて季節感のある催しやレクレーションを行っています。また、患者様とのコミュニケーションを大切にし、患者様と職員の共同作業も大切にしています（洗い物やテーブル拭き、お絞りたたみなど）。いつも笑い声に包まれた明るい病棟です。見学も歓迎しています。お気軽にご相談ください。患者様をご紹介いただいている医療機関の皆様、いつもありがとうございます。これからも、よろしくお願い致します。

**【施設基準など（4 月現在）】**

**回復期ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病棟入院基本料Ⅰ**
**疾患別ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ（脳血管疾患等Ⅰ・運動器Ⅰ・呼吸器Ⅰ）**
**言語聴覚療法・集団コミュニケーション療法実施**
**脳卒中地域連携パス、大腿骨頚部骨折地域連携パス**

## 「食べる」ことを大切に

内科医師・ＮＳＴ責任者　**砂田　恒一郎**

私たちは、普段、食べ物を口から食べてそれを栄養にして生きていますが、もし、食べられなくなってしまった場合にはどうしたら良いのでしょうか?

当院は日本経腸栄養学会のNST(※1)稼動施設の認定を受け、栄養サポート活動に取り組んでいます。チームは医師・看護師・管理栄養士・薬剤師・言語聴覚士などの専門スタッフで構成し、それぞれの知識や技術を用いて、胃ろう(※2)の患者様を含め栄養摂取状態を把握し、食べられない原因や改善方法について話し合い、栄養面から全身状態の改善を図ります。栄養面が改善しないと命に関わることもあるのです。

全く食事を摂れなかった患者様が、いろいろな工夫でご飯を食べられるようになり、元気に退院される姿をみると、栄養サポートに取り組んで良かったとつくづく思います。

**【(※1) ＮＳＴ】Neutrition　Support Team = 栄養ｻﾎﾟｰﾄﾁｰﾑ**
**【(※2)胃ろう】口から食事が摂れない状態の方が栄養を補給する方法の一つ。内視鏡を使って腹部から胃に通じる小さな穴を造り、ここにチューブを通して胃に直接栄養を入れます。**